

城陽市 戸山 初美 (85歳)

私が9歳の春だったと思います。出征している父の面会日の通知が来たので、長女である私と母は、父の好物のおはぎを重箱に入れ、1歳の弟を背負い、朝5時から徒歩で3キロの道のりを電車の駅まで歩き、電車を乗り継ぎ舞鶴の海軍宿舎まで父に会いに行きました。

父は水兵さんの制服を着ていて、おいしそうにおはぎを食べていたのを思い出します。父は私の頭に手をやり、よく来てくれたと涙を流していました。

私たちが海軍宿舎に出かける前に、近所のおばさんが泣いて見送ってくれ、当時は隣同士で助け合う付き合いをしていました。辛いこと、悲しいことができるとうすぐに皆さんが家に来て励ましてくれて、現代では考えられないような時代でした。

終戦の1年ほど前だと思います。B29が恐ろしい音で家の上を通り過ぎて、木津川の河川敷に墜落しました。ものすごい黒煙が上がりました。私の父は出征していたので、祖父と一緒に走って見に行きました。私の家から15分くらいの所です。大きい飛行機が黒く焼けて、男性の大きな靴が片方だけ黒焦げになり転がっていました。私は子ども心に、よく家の上に落ちないで良かったと思い、恐怖で震えが止まりませんでした。もう1人の乗員は落下傘で東方面に落ちたと聞きました。

終戦は10歳の8月15日の12時に発表があり、本当に安心しました。これであの怖いB29が飛んでこないと思い、ほっとしました。けれどその後も食べ物がなく、毎日家で作っていたかぼちゃ、じゃがいも、さつまいもなどを入れたおかゆと梅干しで、常に空腹に苦しんでいました。学校には通っていたが、お昼は家に帰っておかゆを食べ、再び学校へと戻る生活でした。白いごはんが食べたくて、魚や肉もほしくて、夢を見ても食べ物のことばかりでした。

戦争は二度と起こしてはならないと思います。

今は、いろんなおいしい食べ物があり幸せな時代で、今の日本の平和をありがたく思います。